

り、又は時の
一興と催し
陣中の笑ひ
草に詠して、
たけき武士
の心をも慰
むる一助と
も相見へ侍
る、今の世の
落首といふ
は、むたいに
人をろしり
人のがい

く出来して、板行附んと欲するに及んで、戯を予
に請ふ予之を聞するに字々雑談を笑き句々
泊を極む、清雅雄渾急度上なり、嗚呼目出度さん
す、此集や世間の戯氣之を見て、又能く重ねて戯
氣を盡さば、戯氣焉より大なるはなし、

阿房苦齋評云、戯氣の二字を以て太平樂の後押へをなす
最も妙、太平樂を云ふは即ち戯氣、戯氣は即ち太平樂なり

成のみ尤もつゝしむべき事ならし、

一半井卜養狂歌に秀句いひかけ多くよめるは、上手のうへにて
坐敷の興にさらりとよめると見へ、元來歌學あつて古今傳受
をも古卜養は傳へし家とかや風聞あれば卜養にかいても誹
諧の名句も多し、いかやうの狂歌にても躰をさまざまによ
みかねる人ならねども、たゞ坐興のみのしわざと見へ侍るな
らし、

一中頃の後撰夷曲集十巻のうち、狂歌の掟といふ一冊あり、管
見するに、凡尤なる趣なれども、狂歌上の句に狂言ありて、下の
句に狂言なきは悪し、下の句に狂言ありて、上の句に狂言なき
は如何、狂歌の掟にろむけりと書り、此段かつて心得がたし、い
にしへの狂歌と考見るに、上下に狂言なきのみなり、今にてい
は、上に狂言ありて、下に狂言なく、下に狂言ありて、上に狂言

なきはかけありせ、おなじくは上下に狂言あらまほしといは
んはさもあるべし、狂歌には上下に狂言なくて叶はずといは
もくいはれなき事なりいにしへの狂歌は、名高き歌人詩人
も時の興によみたまひしなり、其外曉月坊酒百首雄長老百首
に中洗也足軒御点あれども、上下の狂言のなき評議これなき
をあしきといはんや、詞はうつくしくかも、心だにおかしくば
狂歌なるべし、

◎狂歌

子子孫彦

●年のはじめによめる
ふん込の姿もけさは上下に

●全

野戸川俊

あらたまる代の春の日の足

にこくとむかふ雑煮の花かつは

笑ひかけたる春の山盛

濱邊素人

●全

わし引の山師の言葉思ひ出ぬ

こがねのつるの若かへる春

山道高彦

●全

上戸下戸明たる口へ餅と酒

ことしも腹のはるは來にけり

大賢門陰 鳥次

●全

かちまけもあらさうくし双六に

また欲つらとはるは來にけり

小篠茂留

●全

壽もたんくふゆる敷の子は

●六十四の春をひかへて
春のふたどる重詰の内
面白坐染

しめくゝる財布の口も明てけさ
金であたまをはるはさにけり

●全 壺石文

ことよきはあいはらげのうまの年
霞とよにもにいさみたつ春

●全 多田八成

ふる年もひと夜あぐれば二日酔
また初春にひかへ酒かな

●全 土師鏡安

塞翁がうまの春とはなりにけり
人間萬事をたやかな御代

●全 山東京傳

目に鈴をはるたつけふの空はれど
まつげにかゝる霞さへなき

●有心 風外道人

ものいはぬからは心に一物の
なくてかなはぬはらたち坊主

●禪定心 無難禪師

せぬときの坐禪を人のしるならば
なにか佛の道へだつらむ

●心のひら 常足

もだんする己がこゝろをたゝき鉦
となへぬまでも手にはどれがし

●心の邪 新庵壺齋

天生のあしころよこに月夜蟹

こゝろは清き水にころすめ

自休禪師

不落にて野狐になりたるろの罪の

うへに不昧は二度のあやまり

傳教大師

見せいはすきかざる三ツのさるよりも

おもはさ累ころまざるなりけり

自休禪師

ひとすぢも持たぬ繩にてしめあけて

身うごきさせぬ法の折鑑

原甫

たるむとも思ひな捨る人ごゝろ

天生のあしころよこに月夜蟹

こゝろは清き水にころすめ

自休禪師

不落にて野狐になりたるろの罪の

うへに不昧は二度のあやまり

傳教大師

見せいはすきかざる三ツのさるよりも

おもはさ累ころまざるなりけり

自休禪師

ひとすぢも持たぬ繩にてしめあけて

身うごきさせぬ法の折鑑

原甫

たるむとも思ひな捨る人ごゝろ

くさり繩にもまたとり得あり

月心居士

びんぼうの棒にわが身をしむられな

こゝろきかしてふりまはずべし

月丸

心からなりころさがれ夕がほの

ろの身に秋のはてすみへける

霞橋

親が子に勘氣にさせる紙子あり

寒氣に親へさせる子もあり

白隠和尚

世の中は唯に坐頭の丸木橋

わたるこゝろで渡るなるらむ

百九十七

●心の的
弓もおれ矢もつきはつる所にて

さしもゆるさで強く射て見よ

全

●魔心
折得ても心ゆるすな山さくら

さるふあらしのありもころすれ

道元禪師

●心火鬼形
地ごとくとは限の上のつるしもの

あまりちかくて見へぬなりけり

無難禪師

●全
れもふまゝ心に罪とつくらせて

われど地獄へつき落すなり

よみ人しらす

目に見えぬちごとくを胸に取上せて

我身をせむるわがこゝろかな

定九

●立春
今朝はゝや古年の矢のはなれ口

眞一文字に立かそみかな

飯盛

●早春
歳のよる春とめでたいくと

いはふおろかを山も笑ふか

金鶏

●初春
うこそなき春やこよみの大將軍

餅の備へもかたく見へけり

裏住

●震
初震帯にや短したすきには

● 餘寒

早蕨のにぎりこぶしもまだ出さず
寒さに山の懐手して

左位

● 残雪

ふりし時鵝毛に似たる雪なれを
今もとびく残る山のは

桃成

● 若草

生酔はねよげにみゆる若草と
結ばんこととしろねもふ

橋洲

● 柳

春風にこぎつかはれて青柳の
めの出るはせにはたらきやそる

佐久留

● 花

一りんを千々のこがねにかへて見る
花は浮世の勘定の外

眞顔

● 全

三度くふ飯よりわかそながむれを
命はよなの下にころあれ

船積

● 全

入相の鐘にちりげはこたえても
嵐はよほと花にけんべさ

金塔

● 春曙

邯鄲の枕どあちらち風に
さめて榮花の春の明ぼの

光

● 遅日

白壁

のどかなる風の手ともてまもるれば
春の日脚のよびくとしつ

●遊糸

仲家

塗

春の日は須磨も明石もゑろにしき
うら一めんに遊ぶ糸もふ

●春雨

万

象

千金の花のうらはと見ゆるかな

●春駒

小粒となりてふれる春さめ

●春駒

三

阿

羅

伯樂が灸をすえてや放ちけん

●歸雁

春の野飼の駒いはふなり

●歸雁

雨

什

故郷へ無事で歸ると花にして

櫻も見せにいろく雁金

●雉子

美

憐

ひたすらにきいすはけんよけんとして

●蛙

花の立にもかへよとや鳴

●蛙

東

作

身を守るかくれ所はこゝろと

●燕

智恵を古井に蛙なくなり

●燕

よみ人

しらせ

つばくらは何大望のあるやらん

●三月盡

やたらにくゝる橋のまたくら

●三月盡

不

塔

三月はつくれどしちのふる裕

●三月盡

うけぬかぎりは春に予ありける

●全

いやよひも卅日の夜食すみぬれば

岡持

●更衣

みろのかもなし花のかもなし

正式

花の香をおしみてけふも着かへぬを

裕もたぬと人やみるらん

●全

花のかをとめし袂にわかるゝは

けふの衣のあわせものなり

直成

月雪と見るは榮耀に餅の皮

むかふのきしにさいたうの花

光

●時鳥

時鳥自由自在にさく里は

酒屋へ三里とうふやへ二里

眉住

●早苗

賤の女も早苗とるには行義よく

ならふや菅の小笠原流

二 彌

●鵜飼

のませては船へはかせてとる魚の

つみはしりからぬけるうづかひ

俊 彌

●五月雨

行く水の其はげしさは兄よりも

分て青ますさみだれの河

秋 人

●橋

葉の大將とてろ見へにけれ

一二五

● 螢

こがねづくりのたちばなのいろ

龍リョウ 雲クモ

世よの中なかのたれもほしかる色いろなれや

金かねと螢へびはつかみつくはせ

遊ユ 人ひと

● 夏月

夏なつの夜よは月つきのさしよりいろがれて

鶏とりのうたひの残のこるあかつき

秋あき 人ひと

● 蓮

十露じゆ盤ばんのけたかく見みゆる蓮葉はすはに

けさばらくとをく露つゆのたま

金かね 鶏とり

● 夕顔

夕顔ゆがなよ花はなのさかりと引ひのばせ

千瓢せんたうとなりて長ながからんより

人ひと

● 氷室

謎めい々々やなやひひろの水みづ無な月つきへ

かけてもさらにとけぬなるらん

よみ人よみひと しらす

● 夕立

入いに口くちありとしきけば暑あつさにて

呑のたる水みづをはくか夕立ゆがた

只ただ 取と

● 立秋

すつはりと桐きりの一葉ひとはに秋風あきかぜの

手てのうち見みへてをどろかれぬる

米こめ 人ひと

● 全

朝あさまたさくらわ所に立たて居ゐて

人ひとをとろかす秋あきの初風はつかぜ

真ま 顔かほ

● 早秋

繁さかん 伎ぎ

立田山木々のいろはも手習の
また身にしみぬ秋の初風

よみ人 しらす

● 全
はつ秋や三番叟かなろよくと

身もしのぎよくなるやすいかせ

雄鳥

● 鹿
二三丁まきに聞ゆる鹿のねは

おかべのかたのもみぢにやなく

よは 氣

● 野分
わたらしき壁まで頬をふくらかし

野分のあしたおかしくもなし

三陀羅

● 全
鬼こもる安達がはらも吹われて

● 月
もろこしのかたへ行きてわが國に
野分に骨の見えるあばら家

衰成

● 虫
夜なくはめづらしからせ晝の野へ
とゞまれ秋の仲まろの月

卯雲

● 菊
品をわけかたちによりてうれくに
虫のねごとを聞にころゆけ

三和

● 全
白菊にならふ黄菊も慾目には
皆名がつきの菊の花園

古喜

北斗をさるふこがねかど見る

● 九月九日

けふばかり下戸に異見のさくの酒

卯 二百十

雲

しら露ばかりのめやうたへや

● 紅葉

漢 江

もみぢ葉は千しは百しはしほしほしみて

から錦とや人のみるらん

● 全

橘 洲

獨見て相手はしさの紅葉がり

鬼どもくまん林かんの酒

● 暮秋

江戸 住

秋ふかく染ておはりとなるみがた

しぐるゝ袖をしぼるばかりや

● 初冬

飯 盛

貧乏の神が出雲へ立とはや

よねもこがねも冬どころなれ

● 全

金

秋の日もつゐ十月とけし坊主

いつの間にやら神もたつたり

● 落葉

光

寐てさけを落るはおとのすさまじや

頃は鼠のかみな月とて

● 残菊

よみ人 しらさ

置露のたまさか残る一本に

一りんてらす月のしら菊

● 時雨

業 枝

鬼ならぬ神のお留守はしぐれして

せんたくすべき日和だになし
渭 明

●霜
鼻の先さらるゝばかりつめたきは
霜のつるぎのふれはなりけり

●霰
あられ
あれはてし不破の關守もる役も
もるにあられの玉ちればこそ
橋 洲

●雪
降り
降つもる雪を達磨につくらせて
よ ぼ け

●寒蘆
霜やけのいたみもつよきあしのはの
酒 壺
こたつにしりの腐ることみん

おきふしならでかれたちにけり

●冬月

かみろりのはわたる月のするせさや
橋 洲

●千鳥

打てくる波のうけ太刀みつ汐の
遠山松の霜にきたへて
ましこゝるへてとぶちどりかな

●網代

夏虫に似たりや宇治の網代守
丸 家

●埋火

埋火の火を筆に灰へ字を
柳 交

●歳暮

かけ立るなりすみとつきては
岡 持

とし浪のよするひたいのしはみより

くるゝはいたくをしまれにけり

飯盛

● 全

寒餅のしまひの臼の一杵と

ともに今年のとしもつきにき

奎網

● 除夜

福はよろに鬼はせうでも節分の

まめより外の事はねがはじ

雄長老

● 全

鬼は内福は外へと出すとも

としひとつつよらせきもかな

中栗

● 松

うつむりになるてふ松のおひたちは

枝に二階も三かいもあり

近道

● 山

一合から九合かぎりの富士をみて

など三とくの山といふらん

搔安

● 鶴

万ねんの龜のよはひにくらぶれば

まだ九千歳わかのうら鶴

よみ人しらす

● 橋

津の國のながらの橋はくつれども

歌よむ人の口にかゝれり

千万里

● 別

行人を今半道とおくる身も

わかれかねてはまた一里づか

●全 戻り道千里の馬もあれがしな
よばけ

●旅 別るゝ人のはなむけにせん
よみ人 しらす

旅はたゞ行くれ竹のむら儀
とまりてはたちとまりてはたつ

●全 江戸を出で一、二、三、四、五日の
全

●全 鞠子の宿に着にけるかな
元 成

川留にあふて居ながら狂歌よみ
よんどころなく名所を予しる
彌 丸

●山家

浮世をばさらくすてしきれ珠敷の
くる人もなき山すまひかな

●老人 諺にねづみとらずと老はてゝ
今はいたちもくるしかりけり

●無常 千金のおもひをなせし人だにも
わづか五りんにかはる世の中

●寺 山寺の冬の夕ぐれきてみれば
よみ人 しらす

●懐舊 入用のかねに施主をつさける
金 鶏

老が身のつふりをなでゝ戀しきは

● 述懐

坊といはれし昔なりけり

赤良

世の中はさてもせわしや酒のかん

ちろりの袴きたりぬひだり

金鶏

● 全

いかなれば貧の病の妙薬を

千金方にかきもらしけん

よみ人しらせ

● 祝

お目出たやくとて君が代を

めでたがるはどめでたかりけれ

一休

● 題しらせ

極樂はいつくのはどよおもひしに

杉葉たてたる又六が門

● 無常

いつの日のいつの時にか出来る

全

房めぐりくつて後はかつたり

● 蛸買に遣しけるに使おるかりけれを

全

此度はいろぐといふに長袖の

蛸の入道みちのおろさよ

全

● 善導の讚

くろかりし衣の色は黄になるは

善導大師はこやたれけん

全

● 題しらす

弘法は鍋のさかやき石の髭

繪にかく竹のともすれの聲

● 全

にくげなき此されかうべあなかしこ
めでたくかしく是よりはなし

全

● 全

人は武士柱は檜魚は鯛

全

きぬは紅梅花はみよしの

● 興福寺三十講の座へまり水がちなる

粥たうへけるとて

西

行

我さへもまだくひたらぬ水かゆの

底にもみゆる影ぼうしかな

弘

法

● 題しらす

西東北よ南よろれはさう

天地の外はものゝふるさと

宮

川

尼

● 全

此尼が西方けがすどがあらを

ゆしどりたまへ彌陀の浄土へ

蜀

山

人

● 題しらす

敷島の道をたしやに行く人は

足の三里に灸を季鷹

季

鷹

● 返し

さしもぐさゝしもしらじと思ひしに

すへたかやいと聞予嬉しさ

雄

長

老

● 全

難波人よしやともいへ我が目には

神も照らん伊勢のはま萩

●全

雪ゆきをれのふじの大おほだけ筒つつにして

信のぶ 海うみ

残のこらせいけてみよしのゝはな

●時鳥ときどり

夏なつの夜よはほとゝぎすに不く喰くらはるゝ

貞まこと 徳とく

蚊帳かやへもいらでまつとせしまに

●題だいしらせ

床とこのうちになにやらくろく見みへぬるは

トと 養やし

烏丸からすまる殿との手跡てあとかあゝ

●全

むさし野のにはゝかるほとの團つらかな

那な 洞どう 軒けん

拂はらひてのけむふじのむら雲くも

●全

行ゆき 風かぜ

よゝあかは絶たへぬ浮世うきよの嵯峨さあがの释迦しやくわ

お身みぬぐひにとゝれる散ちせん

●全

貞まこと 御ご

住すまよしや木きの間まの月つきのかたわれは

ありけるものところゝにろりはし

◎短歌

●春歌はるのうた

大おほぶくの先まきたつ春はるの祝いわ儀ぎとて茶ちや筥せん松まつにも

めで竹たけをろへつゝかざるしめ繩なはによつこぶどころ

だいでぐとしだいもよげにかきならべはたはらもつみ

かさねぬる門口かどぐちにしもよりきたる禮らい者しやは荷に

かちぐりをしみに着きなして物ものまうの聲こゑさくからに

請取し 年玉みれば へぎにする 末ひろく世を
 せんす箱に をさし置つゝ たかひにし 詞の花の
 口く に いひ出したる 蓬菜の かはらけ取て
 さしむかひ いせえび程も 腰かやめ 時宜をすまして
 箸をとり はさむ肴は 數ぐの これと參れど
 もてなして たへつをさめに 成ぬれば 春のはなしの
 はじまりて さく驚の 歌の道 歳旦歌とて
 をか四季は 神ことなれば 人の ぐの 笑ひ草ども
 よしならばなれ

附 録 終

内務省納本濟

昭和九年八月十日印刷
昭和九年八月十五日發行

〔定價一圓二十錢〕

不許
複製

著者 十八公堂主人編
 大阪市東淀川区木川西ノ町三ノ三三
 發行者 宮本彰三
 大阪市西區阿波座上通三ノ三九
 印刷者 幸松一雄

發行所

大阪市東淀川郵便局前

國民書院

振替大阪六八〇三番
六九五七〇番

終

